

口蓋裂術後における言語治療と矯正治療との関連について

研究協力者

新潟大学歯学部 花 田 晃 治

口蓋裂の術後に現われる機能障害のうちで咀嚼障害は患者のその後の成長に悪影響を与えるので、出来るだけ早期に矯正治療を開始する必要がある。一方、口蓋裂児にあっては言語障害を有するものが多く、この治療もまた早期に開始する程良好な結果が得られるといわれている。ところが矯正治療に用いられる矯正装置と言語治療に必要な Speech-aid を同一顎内に同時に装着することは、それぞれの治療にとって障害となる。そこでまず Speech-aid 装着期間と言語治療との関係を調べることにより、言語治療と矯正治療が一つの治療体系の中で実行できるかどうかを研究することとした。

言語治療室において系統だった治療計画に基づく早期手術の術後の言語管理体制下で治療を受けた Group 2 について Speech-aid との関係を調べた。その結果、表1のように Group 1 の 8 例では、難治例はなく計画的な Observation のみによる 5 例と Speech-therapy を必要とした 3 例のすべてが完全治癒例であった。一方、Group 2 の 9 例についてみると、全症例が Speech-therapy を必要とし、完全治癒例が 7 例、難治例が 2 例であった。Speech-aid を必要とした難治例の 2 例は、aid 装着が遅れたため glottal stop による異常構音が強固に定着し、その改善に長時間を必要としたものである。Group 1 においては、Speech-aid 装着例のうち 5 例が observation のみで正常言語を獲得しており、鼻咽腔閉鎖機能不全例に対する早期装着の重要性が推察できる。現在では 2 才台の装着例あり、低年齢化の傾向にある。Speech aid 装着については、Group 1 と 2 の間に明らかな差が見られ、それが言語成績に影響し、Group 1 の observation 率を高めた要因のひとつと考えられた。こうした結果から、早期より計画された体系化した治療を行えば、Speech-aid が不要なものやかなり早期に使用しなくなるものがあることがわかり、その後の矯正治療においては計画通りの矯正装置を自由に使用できるといえる。このことは咀嚼機能の回復をはかるための矯正治療にとって極めて有利なことである。

Group	症 例	Speech -aid 装着 症例	完全治癒例		難 治 例	装着年齢
			ob	st		
1	53	8	5	3	0	3.7 才
2	49	9	0	7	2	4.7 才

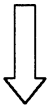
ob : observation 言語発達、鼻咽腔閉鎖機能、う蝕予防、聴力障害、心理・発達検査、母親指導などを定期的に行うこと。

st : Speech-therapy



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



口蓋裂の術後に現われる機能障害のうちで咀嚼障害は患者のその後の成長に悪影響を与えるので、出来るだけ早期に矯正治療を開始する必要がある。一方、口蓋裂児にあっては言語障害を有するものが多く、この治療もまた早期に開始する程良好な結果が得られるといわれている。ところが矯正治療に用いられる矯正装置と言語治療に必要な Speech-aid を同一顎内に同時に装着することは、それぞれの治療にとって障害となる。そこでまず Speech-aid 装着期間と言語治療との関係を調べることにより、言語治療と矯正治療が一つの治療体系の中で実行できるかどうかを研究することとした。